
バカと邪臣と召喚獣

御伏四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと邪臣と召喚獣

【Nコード】

N6068W

【作者名】

御伏四

【あらすじ】

『悪童』こがみまさたか 火上昌公は世界に類を見ない『試験召喚システム』を導入した、試験校文月学園に通っていた。

バカとテストと召喚獣の二次創作、初投稿作品です。原作キャラとオリキャラの織り成す物語どうぞお楽しみください。ちなみに題名の『邪臣』の読みは『レイ』です。

プロローグ（前書き）

超駄文です、悪しからず。

ブローグ

春、桜並木の続く道。そこを一人小柄な少年が歩いている。咲き誇る桜を見ながら少年はふと呟く。

「オレ、何クラスだろ？」

彼の通う学園——文月学園では学力に応じて順にクラスが振り分けられる。最高位のAクラスは超が着く設備を有しており、逆に最底辺のFクラスは極めて残念な中で授業を受けることになる。

「まあ、出来ればアイツらと同じが良いな」

そう言っただけで視界から桜を消し遠くに見える校門に向かって走り出した。

「遅刻ギリギリだぞ、火上」

「おはよう、西村先生」

「先生には敬語を使いな」

校門に着いた少年、火上昌公の前に現れたのは文月学園最強の人物、西村宗一。

「ん、お前の姉はどうした？」

「いつも通りの重役出勤ですよ」

「そうか、彼女は体が弱いからな」

「オレに言わせれば、体力不足で設定の上に胡座を掻いてるだけなんですけどね」

「お前は自分の姉に厳しいな」

「そうですかね？自分じゃわかりませんね」

「全く……む、そつだ。ほら」

不意に、宗一は封筒を昌公に手渡す。それはさっき昌公が思案して

いた自クラスを示す紙が入った物だった。

「これが例の封筒ですか。思っんですが何でこんな面倒なやり方をするんです？ 掲示板辺りにでも張り出した方が効率が良いでしょうに」

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチは変わった学園だからな、やり方もその一環と言っわけさ」

「ふーん、どれどれ」

そう言って宗一から渡された封筒を綺麗に開ける。

「お前、封筒を綺麗に破くもんだな」

「几帳面なもんで」

「その几帳面さを少しは学業に向けんか」

「考えときます」

そう軽口を叩きながら紙を見て、少し顔を顰める。

「Fクラス……」

「思い当たることは幾つかあるだろ、俺が試験の監督だった時お前はぐっすりと寝てただろうが。全部あんな感じだったのか？」

「失敬な、化学と物理はちゃんと受けましたよ」

「つまりそれ以外はちゃんと受けてないと言っことか」

「仕方ないでしょう！ 前日見たいアニメの一挙放送だったんですから！」

「そんな堂々と語るな」そこで両人は一つため息をついて再び向かい合う。

「まあ、良いです。結果を受け入れて一年過ごしますよ」

「そうか、なら早く行け。お前の友人たちもたくさんいるぞ」

「了解ッス」

こうしてとあるバカの物語はその始まりを迎える。

プロローグ（後書き）

導入部だけでバカと分かる発言です。
では批評お待ちします。

第一問（前書き）

投稿が遅れて申し訳無いです。多分これからもこんな感じのペースですがご容赦ください。

第一問

「ほう、ここがAクラスの教室か」

昌公がはたと足を止め見やったのは優良な生徒が所属する場、Aクラスの教室。クラスを示すプレートは緋色の金属片に金の装飾がなされており、さらに教室の前には立派な観葉植物が置かれていた。

「外だけでもここまでたあな、中はどんな感じかな……………」

その高貴な雰囲気の外観に興味が沸き窓を覗く昌公が目にしたものは――。

通常の5倍ほどの広い教室。

壁一面を覆うほどのプラズマディスプレイ。

個人個人に配布されたノートパソコンやリクライニングシート。

「うわぁ……………」

最上級の設備とは聞いていたがここまでとは思わず、流石にドン引きする昌公。

「金をかける所間違えてんだろ。まあ愚痴っても仕方ねえし行こうかな…………ん？」

そう言つて昌公は苦笑いしながら再び歩き出そうとしたが、強い驚きと疑問の感情がこちらに向かつてくるのを感じ後ろを振り返る。

「ま、昌公！ちよい待って！」

すると階段から大慌てで走ってくる男子に昌公は呼び止められた。

「お前、Fクラスってマジか！？」

「悪いか、ゴッホ」

前髪が顔の下に届くほど長く顔の右半分を前髪で覆ったゴッホと呼ばれた男子、紫堂拓武は息絶え絶えに中学からの友人の残念な結果

を驚いた。

「嘘だろ、振り分け試験前のテストの結果俺とだいたい同じだったじゃねえか」

「うるせ、人の事情追及すんな。つーかお前はとうだったんだよ？」
「モチ、Aクラス！苦手な数学を頑張つて一夜漬けた甲斐があったぜ！」

「暗記教科じゃあるまいし、なんて無駄な」

「何だと！たゆまぬ努力の結果をバカにするのか！」

「一夜漬けの時点であんなにやるからな」

そう言い合つて睨み合い、数秒ほどした後深呼吸して再び向き合う。

「ま、何はともあれこれで優子と一緒に授業できるぜ」

「嬉しそうだな」

「あつたり前だ！何せ小学校の時いつも振り分けられるクラスが別だったからな！中学校は別だったし！」

「はいはい、そうだったな。じゃあとつと木下さんの所に行つてこい」

「言われなくても！じゃ、また放課後校門で！ゆゝこゝ！」

「やれやれ、さて行くか」

数秒後、後ろから拓武の悲鳴が聞こえたが無視を貫いた昌公だった。

「ほう……ここがFクラスか……」

再び足を止め見やったのは己を含む成績劣等生が所属する場、Fクラスの教室。クラスを示すプレートは所々破損した他教室の物に『F』と書かれた紙が張つてあるのみ、さらに教室の前には観葉植物とは似ても似つかない毒々しい茸が生えていた。

「教育格差ってレベルじゃねえぞ……」

しかし文句を言つても目の前の光景は変わる筈もなく深くため息を

一つ。

「まあ、ここに一年間世話になるんだ。とつとと……っ！」

意を決し教室に入ろうとした昌公であったが、教室から感じる悪意の感情に躊躇し、距離をとった。

「雄二か……きつとオレを威かそうとか考えてんだろな」

そう誰にも聞こえないほど小さく呟き、昌公は左手で何かを掴む。

「そっちがその気ならオレからもプレゼントだ、驚きやがれ！」

そう言つて昌公は振りかぶりそれを投擲した。巨大な三日月状の刃がついた長柄のそれ……大鎌は傷んだ木製の戸を破壊しドスンと音をたて、教室のどこかに突き刺さった。

『うおわっ!!』

それと同時に響く低い驚きの声。よく聞き慣れた悪友の声に思わず笑みを溢し、両断された戸を踏み越え教室に入る。まず目に入ったのは廃屋並みの教室の設備と突然鎌が空を舞った光景に処理落ちしているＦクラスのクラスメイトの姿だった。昌公はそれを一通り見てから黒板の側で腰の抜けて立てない悪友を見下ろす。

「クッカカ！ウィース雄二！春休み気分は抜けたか？」

「魂が抜けるかと思つたわ、このウジ虫野郎！」

「まあ今は腰が抜けてんだがな」

「上手いこと言えてねえからな！」

昌公の悪友、坂本雄二は野性的な顔の眉間に皺を作り怒りを露にしてお昌公を罵倒した。

「それと雄二、何してたんだ？」そう言つて昌公が見やる先は先程悪意を感じた（＝雄二がいた）教卓。それには昌公がやはり先程投擲した六尺を超す鎌が深々と突き刺さっていた。

「教師でもあるまいに」そう言いながら鎌を引き抜き、肩に担ぐ。

そんな昌公に雄二は一枚の紙を渡した。

「何これ？」

「読んで見る」

「どれ……」振り分け試験の結果、Ｆクラスの代表を坂本雄二。副

代表を火上昌公とする』だと……」

「そう、だから代わりに教壇に上がって見たんだ」

昌公を見下ろしニイ、と笑う雄二。昌公は雄二を見上げながら

「（一番トップだったからって人より高い所にいたがるなんて、お前は猿か）」

などと考えていた。

「なるほど、つまりここにいる全員、お前の駒ってことか」

しかしそんな考えをおくびにも出さず、同じくニイ、と笑いかけた。

「その通り、お前も俺の部下の一人ってことだ」

「上等、いや下等だな。お前がオレを上手く使いこなせんのか？」

昌公の挑発的な態度に雄二はさらに尊大に構える。

「抜かせ、オレを誰だと思っついていやがる」

「元・神童、現・人面ゴリラ」

「今も昔も人間だ！」

しかし昌公の突拍子もない言葉に雄二は尊大さを消し去り激しく突っ込んだ。

「クカカツ、冗談だ。神ゴリラ」

「強そうだな！？」

「まあ、それでリラ、あのバカは？」

「まさかフルネームの区切りが『神ゴリラ』だと！？斬新過ぎんだろ！？」

漫才のような会話の展開に雄二の突っ込みが冴え渡った。

「って明久？そっぴやまだ来てねえが」

ここで二人はいつもの間の抜けた声が聞こえず辺りを見渡す。そしてその理由が朝のHRを示す音が教室に響いたと同時に遅刻だと証明され昌公はため息をついた。

「はあ……新学期早々遅刻かよ」

「バカだからな」

「うむ、バカだ。ってそれは理由とは違うような」

さっきとは変わって昌公が突っ込む。「さて、じゃあ来た瞬間罵倒

してやるのかな」

「お前は暇人か。まあいい、オレも一緒にやってやるよ」

その言葉と前後し、鎌によって破壊された筈の木の戸と教卓は切り裂かれた痕跡など微塵もなく、いつの間にか元に戻っていた。

『『『ええええッ！！？』』』

そんな驚愕の大合唱後の質問攻めを昌公と雄二はスルーしたとか。

そして何度聞いても聞き出せないと諦め、クラスメイトが再び思い思いの行動を再開してから数分後。ガラララツと木の戸が開き、一人の少年が眩しい笑顔で開口一番茶目つ氣たつぶりで挨拶する。

「すいません、ちよつと遅れちゃいました」

「早く座れ、この塵蟲野郎！！」

「酷いッ！台無しだッ！」

遅刻の謝罪をしたのに、人以下の存在に貶められ半泣きになった間の抜けた面の少年、吉井明久。

その明久を罵倒し、野性味のある顔をスツキリとさせた少年、坂本雄二。

そして雄二と共に半泣きの明久を見てクカカツ、と笑う小柄な少年、火上昌公。

この三人が数時間後に巻き起こす騒動を本人たちすらまだ知らない。

第一問（後書き）

さて今回からこの後書きでは設定の補足などをさせていただきます。本編で出来ない自分の文才に涙です。では一回目は『副代表』です。

・副代表

クラス内の成績次席を意味する。普段は代表を補佐する立場で、代表の欠席時には代表の職務を行う。

試験召喚戦争では代表が戦死することでそのクラスが敗北するように、副代表にも戦争中の規約がある。

・代表が戦争中に回復試験を受けている場合、副代表の戦死が敗北条件になる。また、代表と副代表は戦争中に同時に回復試験を受けることは出来ない。

・代表が回復試験を受けていない状態で副代表が戦死した場合、副代表を討ち取ったクラスの戦死者の中から一人戦争に復帰させてもよい。

こんなところです。またオリ設定が出たときにはここに書きますので宜しくお願いします。

第二問（前書き）

相変わらずの駄文です。それで良ければ是非。

第二問

「って雄二とレイ、何してんの？」

一瞬の間を置いて鬘の用に髪を逆立てた少年と大鎌を持った小柄な少年の二人が去年の頃からの悪友だと知ると、明久は疑問符を浮かべて二人に問う。雄二は先程昌公に渡した紙を見せて説明し、昌公はクカカ、と笑いながら雄二と共にそれを説明した。

「そう言う訳だ明久」

「ふうん。ってレイ、いつまでそれ持ってる気？」

「おっと、そうだな」

一通り話を聞き終えた明久は昌公が持っている凶器に気付きそれを仕舞うよう促し、昌公も明久の言葉に同意し――

ぽんっ

という音と共に大鎌を消し去った。

『一体お前は何者だ！？』

なので、次の瞬間に昌公は再びクラスメイトに詰め寄られる形となった。「禁則事項です」

『通るか！！』

「幻覚じゃね？」

『罷るか！！』

しかし先程と同じくのらりくらりと言い逃れる昌公。すると不意に明久の入ってきた戸の方から覇気のない声がした。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

その場にいた全員が振り向くと冴えない風貌の中年男性が佇んでいた。

「それと皆さん、席についてくれますか。HRを始めますので」

「はい、分かりました。ほらほら、先生がいらしたぜ、取り敢えず

座れよ」

『……………』

流石にHRが始まるので、クラスメイト達は昌公に促され、渋渋自分の席に座っていった。

「じゃあ雄二、レイ。僕らも座ろう」

「おう」

「ああ」

そう言っただけで各々席に向かう昌公達、三人は昌公を間に挟む用に最も後ろの床に座る（ここには椅子は無く、ひびの入った卓袱台と、綿のない座布団だけ）。と座ってすぐ、明久には見えない位置で雄二がちよいちよいと手招きしたので、昌公は雄二の方に体を少し傾ける。

「なんだよ雄二」

「いや、本当にもう嫌がらねえんだなと思ってよ」

雄二の口から出た言葉に昌公は目を細める。

「『レイ』って渾名か？」

「ああ」

「何時の話だ、オレは高校生だぜ。呼ばれ方一つで怒るほど子供じやねえよ」

「数ヶ月前まで嫌がってたのはどこのどいつだよ」

「知らね」

レイ。

火上昌公の至って普通な渾名。しかしそれでも少し前まで彼がその名を嫌がっていたのは事実。

「今となっちゃ、な」

嫌がったことは忘れたよ、と昌公は細めた目を完全に封ずる。その様子を見て雄二も話しは止めた、と言うように軽く息をつく。

「そうか……まあお前がそう言うなら別に良いがな」

「クカカ、人の事詮索するもんじゃねえよ、雄二」

そう言っただけでニツと笑い会う二人、ちなみにこれまでの会話は全て小

声である。

一方、他の生徒は昌公の事など忘れたように設備について担任に不満をぶつけており、それを淡々と捌かれていた。

「……なあ、明久」

「……何、レイ？」

「……あれって正しい対応だと思うか？」

「……僕はここが本当に教育機関なのかと疑いたくなるよ……ハア」
「全くだ……ハア」

小声で愚痴る明久と昌公。バカ二人のため息は教室中の雑音に掻き消された。そして教室が粗方静まった後、福原と名乗った教師は自己紹介を促した。

「では廊下側の人からどうぞ」

「承知したのじゃ」

「ありや、秀吉じゃん」

廊下側の最前列から立ち上がったのは、昌公のよく知るいかにも女子にしか見えない『男子』、木下秀吉。

「僕は木下秀吉じゃ、今年一年宜しく頼むの」

そう言つてニコツと女子のように微笑む（男子である）。その動作にクラス中が身悶えした。

「ああ、なんて可愛い……いや、騙されない。アイツは男、アイツは男……」

「明久、何やってんだ気色悪い」

「どうせ、秀吉に蕩れてんだろ。ほっとけ」

「なんだ？その蕩れって？」

「萌えの最上級だ」

「すまん、知らん」

「だろうな」

隣で頬を赤らめ、体をくねらせる明久を見て雄二と昌公はげんなりとした。

「……土屋康太」

次に立ち上がったのは小柄な体格の男子、土屋康太。彼は名前を言った後、すぐに座り福原教諭に見えない位置でカメラを弄る。

「アイツもこのクラスか」

「まあ、やってることは去年通りだな」

未だ身悶えしている明久を無視し、二人は知り合いの姿を視認する。
「島田美波です。海外育ちの帰国子女で日本語は会話ができる程度です。」

そう雑談している間にこの教室では珍しい女性の声。昌公がチラと見やればツリ目にポニテのスレンダーな女子、島田美波。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

「ヒイッ!?」

恍惚に満ちていた明久の表情が、彼女の発言と同時に戦慄に変わる。そして彼女と共に一年を過ごした昌公を含めた元Dクラスのメンバーはそれが冗談ではないことを知っており、そのため揃って顔を青ざめさせた。

そして次々と紹介が終わり、明久の番になった。

「なんて紹介するんだ？」

「まあ、黙って見ててよ」

またバカなこと言っただろうなあ、と思いつつ隣の明久に手をふる昌公。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでくださいね」

ガンッ!

明久の盛大なボケに昌公は顔面を卓袱台にダイブさせた。

『『『ダアアーリーーン!!』『』『』』

バキヤッ!

その後が続いた野郎共の野太い叫声に昌公は勢い余って顔面で卓袱台を裂き砕いた。

「——失礼、忘れて下さい。とにかく宜しくお願いします」

吐き気を催したように顔をひきつらせた明久はさっさと自己紹介を終わらせ、卓袱台に突っ伏した。

「吉井君、宜しくお願いします。それと火上君、後で備品申請するように」

「……ハイ」

「……レイ、大丈夫？」

「……大丈夫に見えるかダーリン」

顔一面を青ざめさせながら明久は隣の少年を除き込むが返ってきたのはムツとした口調の言葉だった。

「ほ、ほら掴みは大事じゃん」

「……もう既に取り返しがつかないほど掴み逃したようだがな」

「うつつ……」

そんな二人を尻目に自己紹介は続き、とうとう――

『——宜しく願います』

「じゃ次はオレだな」

「同じ間違いはしないようにね」

「ほざけ、お前と一緒にすんな」

そう言つてムクリと立ち上がる昌公。その一挙一動にクラスが水を打ったように静まり返る。

何故なら彼は不可解。

何故なら彼は不思議。

そして何より不条理。

鎌を持つ彼、それを投げる彼、それで物を破壊する彼、それで破壊

した物を直す彼、それを消す彼。

全てが警戒に値する行動をする彼にクラス中の視線が降り注いだ。
「クカカツ、急に静かになつてくれんなよ。アンタ等が思つてる以上に、思つてる異常に比べてオレは普通の高校生なんだからよ」
相変わらずの人をバカにしたような、煙に巻くような口調、そして彼は言い放った。

「火上昌公、このクラスの副代表。趣味はアニメ、ラノベ。気軽にこがみんって呼んでくれ、これから一年よろしく、ツテカ」

『『『……………ハア』』』

先程までの口調とつて変わったような豹変に警戒どころか軽い呆れすら覚えた大多数のクラスのメンバーは大きな溜め息をついた。
その様子を見て昌公が一言。

「なんだコイツ等」

その瞬間お前が言うなと言うような視線を昌公がクラス中から浴びたのは言うまでもないことだった。

「漸く来たか、火上」

「……………御早うございます、西村先生……………」

一方、文月学園の校門前。火上と呼ばれたニット帽を被った少女が西村教諭に呼び止められていた。

「ほら、受け取れ」

「……………F……………」

「もうお前の弟は教室にいる頃だろ、お前も早く行つて来い」

「……………はい……………」

そう言つてトコトコと下駄箱に向かう少女。

彼女は火上昌公の姉、火上侑奈。玄関についた時、侑奈は一人の人影を見つける。

「うつつ、急がないと……」

ふわふわの髪を長く伸ばした少女、姫路瑞希は侑奈と同じく遅刻しており、せかせかと内履きを履いていた。

「……………」

「あれっ、どうしたんですか？」

不意に瑞希の視界に自分と同じ制服を着ているニット帽を被った少女が映る。

「……………（ビクッ！）……………」

だが次の瞬間には彼女の姿は瑞希の前から消失した。

「えっ？あれ？」

すぐにきよろきよろと周りを見回すが、その姿が映らず、見間違いだっただかと判断すると同時に自分が遅刻した身であったことを思いだし駆け足でその場を去った。

「……………」

瑞希の姿が完全に見えなくなったあと天井からカエシのついた刃を二本持った女子が降りてきた。その天井には刃に深々と貫かれた跡が残っていた。

「……………疲れた……………」

そう言って両手の刃を消し去り、ちょこちょこと侑奈は歩き出した。それと同時に天井の刃の刺し跡は跡形もなく消え去っていた。

第二問（後書き）

昌公の姉、火上侑奈の登場です。良ければ見守ってやって下さい。
では。

第三問（前書き）

皆様。

申し訳ございませんでした！！

早くやろう早くやろうと考えつつ、忙しさに流され、一ヶ月も更新していませんでした。
相変わらず超駄作ですが、どうぞお目汚しを。

第三問

「福村幸平です。よろしく願いします」

「福村君、宜しく願います。それと皆さん、ちゃんと聴いてあげてください」

昌公への警戒心もすっかり消失し、自己紹介も終盤に差し掛かり、だらつとしたムードが辺りを支配し始めた頃。教室の戸がガララツと開いた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

その人物の登場に誰からと言っわけでもなく教室がざわめき始める。「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなのです姫路さんもお願います」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしく願います…

…」

紹介するまでもなく彼等は彼女のことを知っていた。入学して最初のテストで学年二位を記録した学園の才女。Aクラス入り確実と言われた姫路瑞希。驚いたのは、その彼女が全く場違いなこの場にゐることだった。

クラス中の驚愕の感情を如実に感じる昌公だったがその中に唯一人、吉井明久からはその感情を感じなかったのだ。

「（明久……？）」

こういうとき一番感情を曝け出すこの男のそんな反応に昌公は疑問符を隠さなかった。

「ん？どうしたの、レイ？」

そんなこちらを向いて訝しむ友人を見てきょとした表情を浮かべる明久。

「いや、姫路さんがそこにゐるんだが」

「いや、レイ。僕の目は悪くないよ」

「なんで驚かねえんだ？」

「それは……」

昌公の尤もな疑問に明久が答える。それと同時進行で雄二が瑞希に質問する。

「姫路、どうしたんだ？お前の成績ならAクラス入りは確実だっただろうに」

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました」「成る程な」

その言葉を別の人間から聞いた雄二と昌公が同時に頷く。振り分け試験の最中に席を立つということは全教科0点を意味することで、高熱によって途中退席した彼女は成績最下位としてこのクラスに来たと言うことだった。

「失礼な質問、悪かったな」

「い、いえ」

ばつが悪そうに頭を掻きながら謝る雄二に気にしなくていいと言う瑞希。

「お前も大変だったんだな、フラグ建てに」

「い、いや、僕は別に……」

その隣では先生に齒向かった武勇伝を茶化す昌公と少々照れながら吃る明久がいた。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故にあったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

そんな会話の後、クラス内でも様々な言い訳が続出する。

「……」

その様子を見て、昌公達はクラスのクオリティを改めて理解した。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」そう言っ教室

を走り抜け昌公達の方へ向かってくる。

「姫路さん、ここ空いてるぜ」

それを見て昌公が鞆を持って立ち上がり雄二と明久の間の自分の席を（壊れた卓袱台ごと）空ける。

「えっ、い、いえ悪いです」

「気にすんなよ、オレは別んどこ座るから」

そう瑞希に言うのと昌公は雄二の左の席に座り込み、そこにあった卓袱台を元々の自分の席に置き座るよう促した。

「で、では失礼します……」

そう言うと同時に瑞希はぽふっと昌公の置いた卓袱台に突っ伏し深呼吸し始めた。緊張と羞恥の感情を彼女から感じた昌公は明久に目を合わせ、労を犒うよう合図した。

「（明久、なんか声かけてやれ）」

「（了解。）あの、姫路さ」

「姫路」

「（おい、雄二）」

そこへ明久の声が瑞希に届く前に、雄二の声がそれを遮る。

「は、はい。何ですか？えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしく願います」

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

と、話しかけそびれていた明久が話に乗る。

「よ、吉井君！？」

すると予想外に驚く瑞希。その反応に明久は軽くショックを覚え、瑞希の感情の変化を読み取った昌公はふうんとどこか驚いたような顔を作り、雄二は――

「姫路、明久が不細工で済まん」

悪友を罵倒し始めた。

「ええっ！？今の話と全く関係無いよね！！」

「そ、そうです！それに吉井君はそんなことないです！」

「いや、擁護する姫路には悪いが明久の顔は細胞レベルで不細工なんだ」

「そんなこと言うなら雄二なんか原子レベルでゴリラ顔じゃないか！」

「んだと、コラ！」

それとなく会話させようとした昌公の行動は、バチバチと火花を散らす闘いへと発展した。

「あー……姫路さん、オレの友人二人が人智を越えたバカかつ度し難い程の顔面を有していて申し訳ねえ」

「「テメエ、レイ表出るやー！」」

これが三人の関係。こんな三人はいつも仲良しである。すると先程破壊され直された教卓の方から、木製のそれを叩く音と明久達を咎める声が響く。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

「あ、すいま」

バキィツ、パラパラパラ

明久の謝罪の声が届く前に、注意の為叩かれた教卓は唯の木片へと形を変えてしまった。

「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください」

少し困ったような顔をしながら教室を出ていく、福原教諭。その様子を見て本当に廃屋並みなのだと改めて理解し、肩を落とすクラスメイト。

「おいおい……」

「あんな簡単に教卓って壊れたっけ……」

「なんかここで教育を受けると思うと気が重くなるな……」

同様にげんなりする昌公達、そこに数人のクラスメイトが昌公に詰め寄る。

「なあ、火上。あの鎌で教卓やその卓袱台直せねえのか」

「鎌？なんじゃらほい？」

「いい加減とぼけんなよ。何人かはさっきので呆れて気にしなくなつたが、やっぱ謎をそのままにしておけるか」

「え」

クラスメイトの真剣な顔に少々面倒臭そうに苦い顔をする昌公。あの鎌のことを説明するには姉のことも話さねばならないし、それを説明すると更なる疑問を抱かせてしまうからだ。

「あの……鎌って何ですか？」

と、瑞希がおずおずと会話に参加する。彼女は先程の事を知らないの、何を言っているのか解らないのだ。

「クカカ、気にすんなよ。何でもねえんだから」

「何でもない事は無いだろ。本当にあれは何なんだ、火上」

「分かった分かった、じゃあ一つだけ。“あの教卓やこの卓袱台は直せない”。詳しい話はまた気が向いたらだ」

「……分かった」

そう言つて、戻っていく彼らを見て鎌を使つたのはやり過ぎたかと昌公は軽く溜め息をついた。

「（あれを使えば鎌の事を気にさせなくするのは簡単だが……そこまですたくもないからな）」

そう昌公が思案していると明久の感情のベクトルが変わる。まるで何かを決意したようなそんな強い意思に。

「雄二、レイ。ちょっと良い？」

「ん、どうした？」

「……なんか厄介事か」

一人はなんの警戒もなく横目で一瞥し、一人は訝しげに見据えて、悪友の次の言葉を待つ。

「とりあえず、ここじゃなんだから廊下に」そのまま立ち上がり廊下に向かう明久の目に可憐な少女の姿が映る。その瞬間に更に決意の感情が高まるのを感じた昌公はクカカと小さく笑った。

「Aクラス相手に試召戦争をやってみない」

旧校舎の廊下、新校舎側と違い木製の内装のそこで少年、明久が一つ言葉を発する。

「戦争、だと？」

「何が目的だよ」

それを聞くのはたった二人の少年、雄二と昌公はどちらも発案者を窺うような顔で訊く。

「いや、だってあまりに酷い設備だから」

「嘘をつくな。勉強に全く興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかのために戦争を起こすなんてあり得ないだろうが」

「吐いちまえよ明久、姫路さんの為なんだろう？」途端、明久の顔から血の気が消え、汗が吹き出す。

「な、何のこと」

「だそうだ雄二、どうする」

「なっ！まだ喋って」

「Aクラスと、か。良いだろ。明久に言われるまでもなく、俺自身やろうと思っていたからな」

「クカカ、物好きな。勝算はあるか？」

「おい」

「まあな、だがもう少し欲しいところだが……」

「なんなら、オレの正体でもバラすとするか」

「ッ！おいレイそれは」

「クカカ、良いんだよ。オレも物好きなんでな、何がなんでも勝つてやろうじゃねえか」

「レイ……分かった、やるからには全力だ」

「ってストローップ！！何で僕を抜いて話を進めてるのさ！」自分

を除いて話を終わらせようとする。そんな屈辱に耐えきれず怒鳴る明久。

「ああ、悪い、悪い。氣い損ねんなよ、頼りにしてッからよ」

「え、あ、うん」

そこで昌公がさらりと対応し、明久を宥める。こういう単純な誉め言葉に弱いのが吉井明久たる所以である。

「じゃあ明久、レイ、気合い入れろよ！」

「おう！」

「うん！」

そう言つて、笑顔を寄せ拳を打ち付ける。

「だが、本当にいいのか？お前の正体」

「いーんだよ、過去のこと言つたつて。それも自分なんだからよ」

「ふうん、なんかレイつて小さい割に男らしいよね」

「クカカ。何だ、その褒め方」

余談だが昌公の身長は150センチ超程の小柄な男子でクラス内で一番小さかったりする。

「言つとくが、小さい、なんて単語もうすぐ来る姉貴の前では絶対言つなよ」

「姉貴つて……レイのお姉さんもこのクラス！？」

「ほう、アイツがか……」

昌公の言葉に二人の顔が変わる。去年数回会う程度だったが彼女に纏わる噂とその所業は強く印象に残るほどだったからだ。

「まあ、そろそろ来ると思つし。用心」

その瞬間。

そろそろ教室に入ろうとくると体を半回転させた昌公の目に、良く知る姿が現れる。

目元を覆う程に深く被った青いニット帽。

全身は昌公よりも小柄で華奢な体つき。

その姿を、己の姉、火上侑奈を視認し、昌公は冷や汗をかく。

「……よう姉貴」

「……昌……」

昌公の呼び掛けに呟くように応答する。

「……………」

「あ、姉貴？」

そして侑奈は無言でゆっくりと昌公に近づく。

一歩、

一歩、

また一歩。

睨まれた蛙のように動かない昌公の眼前まで肉薄した侑奈は。

「……………」

「おっ！？」

ぽふつと音をたて昌公の懷に倒れ込む。突然の行動に昌公はグツと踏ん張り、なんとか支える。

「何だよ、いきなり？」

昌公の問いに侑奈は、

「……………」

甘えの言葉を呟いた。

「……………」

その行動に昌公達は沈黙するしか無かった。

第三問（後書き）

また見てくれると幸いです。

第四問（前書き）

御伏四です。

また一ヶ月過ぎてしまいました……申し訳ありません。
自分の改善点は駄文よりも駄ペースの方のようです。
楽しんでいただければ幸いです、では。

第四問

「コイツは火上侑奈、オレの姉で極度の人見知りだ。あんまちよつかいかけんでくれると幸いだね」

そう言つて昌公は小動物的な外見によつて、クラスメイトの視線を浴びそれを避けるように己の陰に隠れる姉の紹介をそう終わらせ、机に肘をつく。侑奈が一人で座るのが厭だと言ふことで昌公と卓袱台を共有する運びになったからだ。昌公としても、面倒な申請をしなくて良かったと言ふ面持ちであつたが、これから一年姉と同じ机であることを考えるとどちらが吉かと黙考していた。

その内自己紹介も終盤に差し掛かり雄二の番となつた。

「んじゃ、行つてくる」

「ん、一発かましてこい」

そう昌公に見送られ、膝に力を入れ立ち上がり、教卓に向かつて歩を進める。その男の顔には先程のふざけた雰囲気は消え、威厳すら漂わせていた。

「坂本くんはこのクラスの代表でしたね」

福村教諭の問いにコクリと頷き、教卓の隣に立つ。その目はクラス全体を見回しており、Fクラス生徒も代表が何を言うのかと、視線を向けていた。

「俺はこのクラスの代表、坂本雄二。ダーリンやこがみんやらといふけつたいな渾名はねえから、代表や坂本など普通に呼んでくれ」
水を打つたように静まり返つた教室に、野性味を含んだ低い声がクラス全体に響く。

「さて、お前等に一つ訊きたい。このクラスを見る。かび臭い教室、古く汚れた座布団、薄汚れた卓袱台。対してAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシート、更にはドリンクバーに専用の冷蔵庫まであるらしいが」

そこで一旦言葉を区切り、挑発するかのような表情で一言。

「不満はないか？」

『大ありじゃあつ!!』

二年Fクラス生徒魂の叫びを受け、雄二が目を瞑り、そして再び各々を見つめ言葉を紡ぐ。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだ!』

『俺達にも人権はあるんだ!』

『由々しき問題だ!』

雄二の発言に堰を切ったように爆発する不満の声。

「お前等の思いは良く分かった。そこでだ」

その反応に満足したようにニイと口元を歪め、野性味満点の八重歯を見せ、

「これは代表としての提案だが、FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う！」

クラスを巻き込む戦争の引き金を引いた。

『……な、何イイイ!!!』

『む、無理だ!』

『相手はAクラスなんだろう!?叶うわけないだろう!!』

『姫路さんがいれば何も要らない!』

『木下と付き合いたい!』

『島田に踏みたい!』

『火上を愛でたい!』

瞬間、雷に撃たれたように硬直したクラスメイト一同だったが、直ぐに気を取り戻し否定的意見を雄二にぶつける。その批判の暴風雨にも、男はただ目を閉じざわめきが静かになるのを待った。

試験召喚戦争とはこの文月学園に導入されているシステムを使った、学力を戦力に反映したクラス間の戦争の名称だ。学力でクラスが違

うこの学園では、上位クラスほど強い。故にここまでの反発を受けるのだ。

徐々にざわめきも収まってきた辺りで、再び雄二が口を開く。

「いや、このクラスには勝てる要素が幾つもある。絶対に勝たせてみせる」

堂々と、いつそ爽やかに宣言する雄二。その言葉に完全にざわめきが消えるが、未だ無謀を主張する者もいる。

『だ、だがAクラスは……』

その発言を制するように手を突き出し、ニイと笑いながら言葉を吐き出す。

「なら、要素を提示してやる。その前に、福原先生。試召戦争の承認用紙を貰ってきていただけますか」

「分かりました、待っていてください」

福原教諭を退室させた雄二は、次に昌公を呼びつける。

「レイ、副会長だろ。取り敢えず前に出てこい」

「了解」

「……………」

そう言つて、昌公が立ち上がる。己が肩に姉をぶら下げて。

「こら姉貴、降りれ」

「……嫌……」

「しゃーね。このままいくぞ」

「……御自由に……」

「ハイハイ」

と言いながら、小柄な姉を背負う体勢に調整し、教卓に向かい歩く。

「んで雄二、勝てる要素ってのは？」

「そんな格好の奴と真面目な会話したくないんだが……まあ良い、取り敢えずムツツリー二を連れてきてくれ」

幾らか微妙な顔で話す雄二に、昌公は「ほっとけ」と口を尖らせてつ、ムツツリー二と呼称された者の元へ歩き始めた。そんな中、教室がにわかにざわめき始める。

『ムツツリー二……！？』

『あの“寡黙なる性識者”がこの教室に！？』

ある時は、校内を駆ける黒き影。ある時は、被写体を求めシャッターチャンスを待つ狩人。その者を誰が呼んだかついた異称が“ムツツリー二”。

男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑と侮蔑を込めて呼ばれた男。その人物は――

「おい康太。畳に顔つけて姫路さんのスカートの中に視線注いでんな」

「……ぐっ！」

「は、はわっ」

女生徒の下着を覗いていたのを、見つかри呼びに来た昌公に顔面を踏みつけられていた。

「……ま、昌公。せめて武士の情けを……」

「舐めくさりおるな、バカ。姫路さん済まん、このバカが」

「い、いえ」

そう言つて瑞希に会釈し、ズリズリと康太を引き摺っていった。勿論侑奈を背負いながらである。

「ほい雄二」

「この姫路の下着を覗いていたこいつがムツツリー二こと土屋康太だ。」

「……ッ！？（ブンブン！）」

雄二の説明に、康太は己の勁部を左右に揺動させる。

『あれがムツツリー二……本物か？』

『だが見る、あんなにくつきりと畳の跡がついている』

『本当だ、明白な証拠があるにも関わらず否定している。正にムツツリの名に恥じない姿だ』

しかしその哀愁漂う虚しい姿に、逆に証明されてしまった感が醸された。

「クカカ、早々に認知されたな」

「……………（ブンブン！）」

ムツツ…………… 康太がそれでも首を降るが昌公は嗤うばかり。そんな二人を置いて話は進む。

「バットアクター、木下秀吉。こいつも有名だな」

「んむ、儂かの？」

その言葉に目を丸くして、発言者に視線を向ける爺言葉の稀代の美少女こと秀吉。

『おお……………！』

『あの木下優子の……………』

「勉強には自信はないのじゃがの」

クラスメイトのヒートアップとは裏腹に、自信なさげにポリポリと頬を掻く秀吉。次に雄二が口に出したのはFクラス切札の名。

「それに姫路、言わずもがなうちのジョーカーだ」

「わ、私ですか？」

突然呼ばれたことに驚く瑞希。

『そつだ、俺達には彼女がいた！』

『彼女が居れば何も要らないな！』

こちらも本人の意思とは逆にテンションを上げるクラスメイト。更に雄二は次のキーマンの名を紡ぐ。

「あとは島田、須川、福村。一点特価タイプの連中で斬り込み役だな」

「ああ、確かに俺は現社得意だな」

「ウチも数学は得意よ」

「僕も地理が少々……………」

三者三様の反応を返す、ポニテ少女とボサボサ髪男子&メガネ男子。雄二はそれを見やってから隣の男子に負ぶさる女子に視線を移す。

「んでレイの背中にへばりつくこいつがレイの双子の姉、火上侑奈。ほぼ全教科学年の平均点を叩き出すマルチプレイヤーだ」

「……………（ビクッ）……………」

その言葉に益々縮こまる侑奈。しかし昌公がそこに茶茶を入れる。

「無理無理、能力はあっても人前に出れねえこいつに前線は無茶さ」
「レイ、士気下げると言わないでよ」

せつかくうなぎ登りだった場の雰囲気を下げる言葉に、明久が口を挟む。

「クカカ、本当のことだぜ？実際に戦場に出して戦えませんかじゃ洒落にならねえじゃん？」

「そうかも知れないけど今は空気読んで！」

「空気は吸うもの」

「真顔で返すなあ！！」

そんな二人の漫才にも見える応酬に雄二の一言が終止符を打った。

「それに吉井明久と火上昌公もいる」

シン……。

上がった士気にすら。

「雄二、何で僕の名前を出すのさ！？」

「士気が死んだな、明久のせいで」

「レイもだよ！！」

「えっ（・・・）？」

「腹立つ！その顔今すぐ殴りたい！あと顔文字を台詞で現そうとして『カッコテン菱形テンカッコ閉じ』って何さ！？本格的に訳がわからないよ！！」

「訳は平仮名で言つて欲しい」

醜い責任の擦り付け合いを見せられ、目の死んだクラスメイト達に雄二が二人の解説を始めた。

「明久は唯の大馬鹿だ、昌公ことレイはひねくれた大馬鹿だ」

「黙れ、猿顔の大馬鹿！」

しかし雄二は取り合わず、更に続けた。

「そしてこの二人は……学園初の観察処分者と監察処分者だ！」

第四問（後書き）

須川君はスピニアウトの方からのビジュアルです。
監察処分者は次回解説します。

第五問（前書き）

なんとか一ヶ月更新に歯止めをかけた今日この頃。これを期に頑張ります。お楽しみ頂けたら幸いです！

第五問

觀察処分者。

成績不良かつ素行も悪く、学業に関心がない生徒に課せられる処分の名。

試験召喚システムによって喚び出される召喚者の分身《召喚獣》、それに物質干渉能力と召喚者へのダメージフィードバック機能をつけられ、専ら教師の雑用として駆り出される者。

“攻撃を喰らうと痛いので試召戦争でおいそれと召喚できない人物”

觀察処分者の認識はその程度の物。

しかし監察処分者となれば話は別。特筆するほど觀察処分者と変わった点はないのだが、問題はその処分を受けた人物《火上昌公》にあった。

『か、か、監察処分者……………』

『ソイツって……………まさか……………』

その名に騒然となり、口々に怯えを吐き出すFクラス。

口に出すのも憚られる。

名を言葉として紡ぐのも忌まれる程。

十人中十人が、百人中百人が、揃って噤む名。

それは――

「ダークブレイン！」

途端クラス中のざわめきが止み、声の主の方を一齐に、恐れながら、しかし目には確信をもって。

かつてダークブレイン、邪臣と呼ばれた者を見やった。

「……………（ビクッ）……………」

「姉貴、アンタじゃない」

その男、要するに昌公はそんな視線を浴びながら、けろっと、飄々と、

「ども、ダクブレちんです」

そう答えた。

「……………本物？」

「まさかの疑い！？」

しかし目の前の男と彼の邪臣の噂はどうにも一致しなかった。
ダークブレイン
邪臣。

二年前の春休みに百件以上起きた通り魔？事件の犯人。『通り魔』ではなく『通り魔？』である理由は被害者が見つかっており、刺されたと言う自覚があるのに、全員怪我一つ無い状態だったからだ。刺されたのに創がない。自覚があるのに怪我がない。

初期の頃は一中学の一部生徒のみだったが、徐々に被害は広がり、町全体が被害にあった。怪我がないにも拘らず刺されたと言い張る被害者達に最初は虚言だろうと無視を決め込んでいた地域だったが、証言をその中学の教師から警備員、果ては辺りの住民、警察、不良に至る人間が言うものだから、一時は町全体が集団催眠におちている等と言われもした。結局、邪臣は見つからず、誰かも解らず、毎日続いたその事件も春休みが終わる二日前にぱったりと止み、人々の間には事件の終息の安堵と未だ犯人が見つからぬ不安だけが残った。

そんな大事件の犯人が、正体不明の怪人が、身長五尺程度しかない小さな少年だとは、信じることができなかった。

「信じられるか！」

「証拠を出せ！」

「姫路さん大好き！」

疑心と不安と恐怖が入り交じった怒号が飛び交う。矮小な体躯の昌

公が邪臣な訳がない、もし邪臣だったらどうしよう、その場合自分達はどうなるのか。そんな感情が読み取れる。

「なら見せてやるよ」

だから昌公は意地悪く、ニタニタと嗤う。

『ヒツ、ヒイイイイ！！？』

次の瞬間、教室中が寒気に包まれた。まるで極寒の凍土に裸足で踏み入るような最上級の悪寒。

それは昌公の背に凶悪な邪神の姿を見たからに相違無かった。

「レイ」

「ハイハイ」

雄二の声と同時に邪神を納める昌公。

完全に静まり返った教室にドンと黒板を叩く音が響く。

「どうだ！ここには姫路やムツツリー二達に加え、あの邪臣までついている！」

クラス中に響き渡る強く呼び掛ける低音。その声に応じるようにクラスが再びざわめきを取り戻す。

『そ、そうだな！』

『これだけの戦力があれば！』

『Aクラスにも引けを取らねえ！』

「そうだ！それに何より！」

雄二が大仰に手を降り、拳を握り締め、今までより強い目で語りかける。

「俺達是最下位だ！学園の底辺だ！誰からも見向きもされない、屑の集まりだ！！ならば失うものは何もないと言っことだ！」

『オオオオオオオオ！！！！』

雄二の巧みな弁舌と、確かな勝機により、今一体となったFクラス。その最初の標的は――。

「ならば先ずは、Dクラ」

「我々FクラスはEクラスを攻める！」

Eクラス。

「つて、おい待てレイ！何を言つて」

「だがEごときに全員が動く必要はない、よつてこのオレ火上と代表、そして明久だけで潰してくる！」

『！！』

「なつ！？」

「ぼ、僕！？」

驚愕が一瞬、教室中を支配する。だがすぐに声が飛ぶ。但し怒号ではなく、期待の声が。

『流石邪臣！言うことが違うねえ！』

『神童に邪臣。成程すごい組み合わせじゃないか！』

『吉井はどうか分かんが、邪臣が直々に指名したんだ。きっと觀察処分者の名が霞むほどの働きをしてくれる！』

一旦始まってしまえばもう止まらない。『全戦力』の四人（侑奈巻き添え）はそのまま、教室の外へ出ていき、福原先生に残りのクラスメイトに回復試験を受けさせといて下さいと告げて、学園長の印が入った試召戦争の承認用紙を受け取った。

そして現在、四人は相手の根城前に立っていた。

至つて並を思わせる白木の扉。観葉植物も置かれず、全体的に田舎の木造学校を連想させるEクラスの教室。

「こら、レイ」

「ん？」

「どうしてこうなった」

その前で雄二と昌公は揉めていた。正確には雄二がこの流れを気に入らず、昌公に何故こうしたのかを問い詰めていた。

「先ずは雄二、てめえだ。俺も全力を出すだあ？バカか、オレが振り分け時寝不足で今現在お前の下に居るが、去年総合で一度もオレに勝つてねえ奴が」

「……何が言いたい」

途端、場の空気が凍る。悪鬼の目で昌公を貫く雄二と邪神の眼で雄二を横目に見る昌公の視線が交差する。数瞬の末、昌公が挑発的な

口調で口辺を吊り上げた。

「クカ力。簡単だ、てめえの力を見せてみなってこつた」

「ハン、言ってる」

それに対して、雄二も口辺を吊り上げ言った。そんな二人のやり取りを何時ものように聞いていた明久が更に昌公に問いかける。

「他にはなんかあるの？」

その問いに対して、昌公は悪童のような笑みをそのまま浮かべ続け明久を向いた。

「んなもん、肩慣らしだよ」

意地悪く、愉しそうにそう答えた。力試し、明久にそんな幼稚な理由でクラスを動かす戦争の指針を決める物だから。

「……質が悪いよ」

迷わず返答した。

「知ってんよ」

そしてこの即答である。と、雄二が二人に向き、真面目な顔を作る。

「まあ良い。それよりレイ、てめえが言い出したんだ。キチツと働けよ。勿論明久もだ、姫路のため頑張るな」

「おうよ、代表様」

「了解だよ、雄……って！？な、何言ってるのさ！！」

茶化すように言う昌公と余裕なく大声を出す明久。そんな二人にニツと笑いかけ、Eクラスの戸を開く雄二。そして会話に一切参加せず、昌公の背に負われた侑奈。

元凶三人と巻き添え一人はとうとう戦争の場に一步踏み入った。

第五問（後書き）

監察処分者について説明します。

- ・物体干渉の点は観察処分者に同じ。
- ・フィードバックは観察処分者の二倍程。

監察処分者についてはまた追加予定です。

もう一つ、小柄、小柄と描写される昌公と侑奈がどれくらい小さいかを表すため、Fクラスの身長差を出してみました。原作キャラは御伏四設定です。対象は今までで名前の出たFクラス生徒です。

坂本雄二	1 8 4 c m
福村幸平	1 7 5 c m
須川亮	1 7 2 c m
吉井明久	1 6 7 c m
土屋康太	1 6 3 c m
島田美波	1 5 9 c m
木下秀吉	1 5 7 c m
火上昌公	1 5 5 c m
姫路瑞希	1 5 0 c m
火上侑奈	1 4 3 ・ 5 c m

こんなところです。スルーして頂いて結構な設定です。

第六問（前書き）

皆様、今まで当小説を目にして頂き有り難うございました……
あ、いえ終わるとかじゃないですよ？ちよつと女体化してしまった
キャラクターがいますので人を選ぶかなーと。
誰が女体化されたかは見てからと言うことで。
では。

第六問

「失礼しまーす」

「入んぞ」

「スルーすんな雄二！」

不意に賑やかしく、喧しく、Eクラスの戸を開く四人に、その場の面々、Eクラスの生徒は頭に疑問符を浮かべた。

「ん……お前等はFクラスの坂本達だな？どうしたんだ？」

そう四人に声をかけるのはEクラス担任の大島教諭。その顔には生徒と同じ怪訝な表情を浮かべている。

「大島先生、我々はここに用があつて来たのです」

それに答えるのは四人の中で一番目を引く雄二。礼儀正しく応対する様子に似合わないと思いつつ明久と昌公は吹き出すのを抑えていた。

「用？一体誰に」

「ニヤアかにや？ゆー坊」

大島教諭が更に問おうとするのを遮る様に小さな影が雄二に相対した。

小学生と同等の背丈。くりくりとしたつぶらな瞳。ショートヘアに、猫耳をつけていると見紛う寝癖に似たくせつ毛の塊。

「おつ、山下さん。このクラスだったのか」

「おお、こがみんとあきぴー、それにゆにやゆにやも一緒だにや」

昌公の声に答える彼女の名は山下木天蓼。

「ニヤアに用なら後からにするにや。そしたら他校への殴り込みも不良クンの制圧も手伝ってやつからにや」

内面が外見を裏切っている、否。内面と外見が決別している危険人物である。

「いつも通り物騒だな、お前は……」

「あ、あはは……」

「クカカカ、さすが危険物。思想も過激そのものだねえ。」

「……………」

雄二が辟易、明久が苦笑い、昌公が茶化し、侑奈は無視。こんな收拾のつかない暴走機関車のようなやり取りも、この後に続く殺り取りに比べたら、通常運行でしかなかった。

「ここらお前ら、何をする気だ」

不穏な会話の内容に、五人の様子を観していた大島教諭が少し強めに言う。

「あ、いえ、僕達はその……………」

今回対応したのは明久。しどろもどろに説明しようとするが良くテンパる上に思考回路が他と（悪い意味で）かけ離れたこの男は

「ス、スタンガンを借りに来たんです！」

よく悪い方に不時着する。

「にやは、やつぱり。」

「明久！？俺たちまで巻き込むな！！」

「えっ、あっ！ええっ！？」

「お前らちよつと職員室に来い！」

收拾のつかない暴走機関車掛け合いの再開。このまま大島教諭に引っ張られかけた時、ハアと溜め息を一つ吐き出し、昌公がわざとらしい大きな咳をした。

「ゴホン」

「？」

自然、視線がそちらに行く。

「……………（ビクッ）……………」

「姉貴、アンタじゃない」

「にやつはっは、ゆにゃゆにゃは可愛いにゃ。」

「山下さん自重しろ。さて、まあ気張らず聞いてくれて構わねえ…」

…雄二

目はEクラスの生徒を見据えながら、雄二に次を振る。

「その通りだ、俺達は他校に殴り込みに行くわけでも、不良を制圧

しに行くわけでも、ましてスタンガンなどを借りに来たバカの用件とは全く違う」

「雄二、僕を貶す必要性が全く無いんだけど？」

昌公と雄二の言葉に教室がざわめき始める。

『じゃあ何を？』

その言葉を待っていたかのように、昌公が雄二の一步前に出て芝居がかったように言い放つ。

「静まれい！この紋所が目に入らぬかあ！」

『！！』

台詞と同時に昌公が取り出したのは試召戦争の承認用紙。そこには、“FクラスとEクラスの試験召喚戦争を承認する”と書かれていた。更に畳みかける様に、言葉を紡ぐ。

「FクラスはEクラスに対し、試召戦争を申し込む！」

ざわっ……………！？

Eクラスの生徒は戦慄した。

「レイ、この場合俺が黄門か」

「おう、そうだな」

「じゃあ僕は助さんだね」

「お前はうつかり八兵衛だ」

「何で！？」

こんな漫才みたいなやり取りをしている和気藹々とした三名に対し、Eクラスからは不穏な空気が発生し始めていた。

『アイツら、学期の始めからはた迷惑な……！』

『試召戦争って宣戦布告されれば拒否できないんだろ、勘弁してくれよ……』

『あの人達、笑ってるわ……』

『当てつけがましいな……』

『やっちまうか？』

過激な方向にエスカレートしていく会話内容。ちなみに大島教諭は試召戦争の準備をしている為教室にいない。

「先生もいないし、やるか」

「そうね、Fクラスだしね」

「そうだ、上位クラスに攻め込むなんてバカは制裁してやらねえとな」

「待つにや」

それに歯止めをかけたのは木天蓼。さっきまでの陽気な雰囲気をついに封印し、真面目風に話す。

「代表と副代表には考えがあるらしいにや。ね、ひろつぴとみかみん」

そう言つて、木天蓼は二人の少女に目をやる。一人はソバージュの髪にカチューシャをつけたEクラス代表中林宏美。もう一人は肩まで届く髪をまとめて縛ったEクラス副代表三上美子。二人とも何かを含んだ顔をしており、ゆっくりとクラスメイトに話し始める。

「皆、あの一癖背の高い男。中学時代“悪鬼羅刹”だった坂本君よ」
「なっ!?!」

「あの男が!?!」

悪鬼羅刹。

曰く剛力の化物、または百戦錬磨の怪物。いくら体力に自信のある体育会系のEクラスと言えど、無惨に屍の山となつて横たわることになりかねない。

「でもね、別に腕力で勝負する必要性はないわ。寧ろ追い出す必要もないの」

「?」

「彼はFクラス代表、ここで倒してしまえば私達の勝ちになるわ」

「にやはは、皆、そゆことにやん」

相手は四人、それも一人一人が自分達に劣るFクラス。対しこちらは50名。学力には自信はなくてもFクラス以上であることは確かな集団。

「飛んで火に入る夏の虫、早めに叩いて潰せば終わりよ」
とEクラスの方針が固まりかけた頃、昌公達は、

「助三郎は康太だ！」

「どうしてムツツリーニ？」

「スケベだから！」

「“スケ”だけじゃないか!？」

漫才が続けていた。

「お前ら、いい加減に終われ。アイツらここで相手をしてくれるよ
うだぞ」

二人のやり取りを呆れながら制し、聞こえてきた情報を伝える。

「そうか、クカカカ、都合良く事が運んでんじゃねえの」

昌公は上機嫌そうに親指を立て人差し指を雄二に向け、ピストルの
形を模した左手を弾を発射したように小さく振る。

「でも相手は多いよ」

「大丈夫だ、その辺は俺に策がある」

「へえ、任せるぜ」

「お前ら。戦争の時間を指定してくれ」

ガラリと木製の扉が開き、大島教諭が姿を現す。

「今からここで始めて頂けますか、大島先生」

「ここですか？良いのか坂本」

「構いません、立ち会いをお願いします。」

今ここにF E合戦の火蓋が切って落とされた。

第六問（後書き）

分かりましたか？

またたび

山下木天蓼です。一卷で雄二を仕留めるため明久がスタンガンを借りに行った“隣のクラスの山下君”です、女の子にしちゃいました。後悔はしていませんが公開はしております。見捨てないで頂けるなら今後ともバカレイを宜しくお願いします。

第七問（前書き）

なんかさくさく書けたので、RS!の前にこっちを更新しました。
楽しんで戴ければ至高の喜びです。

第七問

「ならば今よりE F間の試験召喚戦争を開始する。召喚承認！」レコグナイズ

大島教諭が承認すると同時に、辺りに青く透き通る色をした空間が展開された。

「教科は保健体育か、まあ国語よりは良いよな」

「レイ、明久行くぞ！」

「了解！」

「任せな！」

「「「試験召喚！！」」」」サモン

その空間内で明久、雄二、昌公が召喚ワードを吐き出す。それに呼応するように、三人の足下から三つの魔方陣が現れる。その中心から徐々に三人の分身が姿を現す。

黒衣を身に纏いその前を空け、内に赤の衣が映える。その右手に握られた木の刀身が、天を突くように掲げられている。

攻撃的な白い衣装を同じく前を空け、肉体を外に晒す。両の拳には指に嵌まる棘のついた鉄輪を光らせる。

鼻、口、頬、顎を覆う口布。銀の髑髏を装飾された帽子。襷袢の如く糸の綻びた外套。その全てが橙に染まっている。その左の掌には不気味な鋭角を描いた長柄鶴嘴。それを器用に振り回し、口布の上からも分かるような笑みを浮かべ挑発する。

……少々描写過多があつたかもしれない。要はこの三人の装備は、

「お前らチンピラかよ！？」

「「お前人のこと言えた義理か、この山賊モドキ！」」」
である。

「木刀にメリケンって、修学旅行のお土産かよ！」

「待て！！明久はそうかもしれないがメリケンサックはそう無いぞ！！」

「何言つてんのさ！！雄二素手じゃないか！！雑魚だよ雑魚！！」

「どっちもどっちだ!!」

「黙れ炭坑夫武器!!」

三人が罵り合いをする中、召喚に遅れてバロメーターを意味するテストの点数が召喚獣の頭から表示される。

『吉井明久 保健体育 71点』

坂本雄二 保健体育 80点』

火上昌公 保健体育 69点』

「この使えない雑魚共があーっ!!!!」

一系乱れぬ仲間への罵声。平常暴走まっしぐらである。

『フン、やっぱ雑魚だな!』

『こんなやつら俺たちだけで十分だ!』

『全くだ!すぐに終わらせてやるぜ!』

誰もが呆れ果てる様相に少数で勝てると判断したEクラスの数人が、一斉に召喚した。だが木天蓼のみその行動に目を剥いていた。

『行け!』

「ま、待つにや!」

木天蓼の制止も聞かず、三体の召喚獣が明久らの分身に突貫する。勝利の笑みすら湛え始める。

だが、それは、油断。

明久に突貫したそれは、その一撃を避けられ、背中に一撃。更に木刀を三度東部に叩き込まれる。

雄二に突貫したそれは、メリケンサックを装備した左手と鐔迫り、右の拳で喉笛を貫かれる。

昌公に突貫したそれは、鶴嘴に得物を反らされ、尖った切っ先で背中から胸を一突き。

それぞれ一瞬痙攣したかと思うと、煙となって消失した。

『え……』

『嘘……』

『だろ……』

「だから待てと言ったにや……」

呆然とし、膝をつく三人。それに対し、今度は明久達が勝ち誇った笑みを浮かべる。

「なんとかなったね」

「どうした？三人だけか？」

「オレ達をあんま舐めてくれんなよ？」

観察処分者、監察処分者。

学園の恥、底辺以下、学年の面汚し。

そう罵倒され、日々教師の雑用を押し付けられている彼等にも、ただ一つ利点が存在する。

「雑用として重量物を運ぶ際、召喚獣を使って作業する。召喚するたび操作に慣れる……」

「その通り、だぜ。クカカツ」

木天蓼の独語に合わせて昌公が笑う。気付かれたからと、どうと言うことはないと言う風に。事実そうなのだが。

『ぐっ……Fクラスごときに……』

「言いたいことはそれだけか？」

途端、地獄から響くような唸り声が膝をつく三人の背から唐突に発せられる。首根っこを掴まれたような息苦しい緊張感が辺りを覆う。声と庄の主は文月学園生徒指導担当、“鉄人”こと西村宗一。

『ひっ……！？て、鉄人！？』

『い、何時からそこに！？』

「人を化物か何かのように言っな！さあ来い負け犬共！」

一瞬の内に脱走しようとする男子高校生三人を掴み、そのまま引きずっていった。

『い、嫌だ！鬼の補習なんかまっぴらごめんだ！』

『あんなの補習じゃない！拷問だ！』

「人聞きの悪いことを言っな、これはちゃんとした教育だ。指導室から出る頃には、趣味は勉強、尊敬する人物は二宮金次郎と言っ立

派な生徒にしてやる」

（洗脳だ！？）

その場の生徒以心伝心、満場一致。大島教諭もこの発言には苦笑い。
『たっ、助け（ガラララッ、ピシャッ！）』

「……………」

特有の緊張感から解放され、しばし無言。

「……………いるとしないでこの差は何……………」

「……………本当に人間かよ……………」

「……………クカカ、怖え怖え……………」

「にゃ〜、あんにやめには合いたくにゃいにゃ〜」

その沈黙を破るは、Fクラスのバカと危険人物。いずれも力なく西村教諭に対する率直な感想を述べる。

「……………ともかく、一筋縄ではいきそうにないわね」

そう言つて一歩前に出るのはカチューシャが目立つEクラス代表中林宏美。

「皆！確かに二人は操作技術高いけど肝心の代表はそうでもないわ！」

と、三上美子が一言。

「みかみんな気づいてたのかにゃ？」

「うん、でもさすが木天蓼ね。私より早く気づいてたんでしょ」

「まあにゃ」代表もそうだにゃ？」

「ええ。見比べればすぐよ、ぎこちないもの」

その言葉に明久達三人は顔を渋くする。

「上手く動かせたと思ったんだがな。ま、すぐにバレると思ってたがな」

「え、そうなの？」

「お前な……………山下さんだぞ、バトルモードの牙猫に油断はならねえ」

「にゃは お褒めに預かり光栄だにゃ」

ペコッと頭を下げ、得意そうにする木天蓼。だが三人は渋面を解かない。

「なら皆！全員召喚、観察処分者や監察処分者なんて無視しなさい！」

宏美の号令と共に教室中に響く数多の詠唱。たちまちの内に明久達は檻に閉じ込められた状態となった。

「いやはや、どうすつかねえ。白旗でも上げて騙し討つか？」

「それはしねえ、つか騙し討ちするつもりなら口に出すな」

「何で二人共そんな余裕なの？僕の方がおかしいのかな……？」

そんな時でも雄二と昌公は余裕の軽口。明久の心配などどこ吹く風だ。

「一斉攻撃！代表を叩き潰しなさい！」

『オオオオオ！！』

美子の命令により、怒号と共に迫り来る召喚獣。剣が、槍が、棍棒が、雄二の召喚獣目掛けて襲う。

「雄二！下がって！」

「オレらに任せて回避してな！」

「分かった、撃ち漏らすなよ！」

木刀の風切り音が唸り、剣を持った召喚獣の手を撃ちすえ無力化し、鳩尾と喉笛に一撃。そのまま煙になりかけのそれを踏みつけ、別の召喚獣に連撃。

鶴嘴が光り、突き出された槍を弾き、一回転してこめかみに突き刺す。引き裂くように振り抜き、他の迫る召喚獣に蹴りを入れ、突貫。だが二人では四十強の人数を捌ききれないのか、雄二の召喚獣の元にも数体の召喚獣が迫る。

その中で木天蓼だけが全体を見る。

（ゆー坊の召喚獣に……？）

攻撃が命中していない。完全に逃げに徹していたとしても、これはおかしい。

（にゃ……？）

よくよく見れば、避けるメカニズムが理解できてきた。

雄二の召喚獣に刃が迫る。それをあらかじめ分かっていたかのよう

に、回避する。その横から別の刃が来る、それも避けられる。

（来る攻撃が分かっているのかにや？）

木天蓼の視線が雄二の顔に集中する。その目はしかと己の召喚獣に向けられ、よく見れば脂汗すら流れている。回避と言う作業は慣れてない者にとってどれほどの集中力が必要か、と木天蓼は考察する。
『食らえ！』

不意に隣の高級生が雄二の召喚獣に刃を突き立てんと猛る。しかしそれは当たらず躲される、やはりあらかじめ分かっていたかのように。

（よもや……声、かにや？）

声、正解。

雄二は己の召喚獣に迫る召喚獣の操作する人物を確認し、その攻撃命令の瞬間に召喚獣を操作し避けていた。

（やつぱただ者じゃにやいにや、坂本雄二）

坂本雄二。

元、神童。

現、悪鬼羅刹。

Fクラス代表。

パワーファイター。

策謀家。

百戦錬磨。

一の態度に一の罫。

一の言葉に一の罫。

一の挙動に一の罫。

図体に似合わない綿密に積み重ね、折り重ねられた精密な謀略。

気づいたときには、ぬかるみ策に嵌まっている。

「にや！？」

木天蓼が気づいた時には仲間を失い、血気に逸ったEクラス生徒が、Fクラスの三人を円形に取り囲んでいた。

「追い詰めたわ！かれ！」

Fクラス相手にここまで手こずらされるとは思ってなかったからか、プライドをいたく傷つけられたのか誰よりも怒りを露にする宏美が突撃の号令をかける。

その瞬間、雄二がニイツと口辺を吊り上げる。

この場合、囲んだと言うよりは――

「跳べ！明久！レイ！」

「ええっ！？う、うん！」

「そいやっ！」

「なっ！？」

ザクザクザクザクザクザクザクザクザクツ。

同士討ちを誘うため“囲むよう誘導された”といった方が正しいか。
「な、な、な……」

目の前で半数以上の犠牲を出したからか、ただただ呆然とする宏美。隣の美子も開いた口が塞がらない。

「雄二！早く言つてよ！」

「うっかり漏らさんとも限らんしな」

「そーそー、雄二の言つ通りだ。ま、こう言うのを敵を騙すときはまず三方五湖つてな」

「……レイ、それ本気で言ってる？」

「国語オンチぶりは顕在だな」

「う、うるせ」

小休止するように操る手を止め、漫才じみた会話をする三人。
だが長く続かなかった。

「ッ！！？」

刃のような影が雄二目掛けて奔る。とっさのことに雄二は反応できず、攻撃を庇うように前に出た昌公の召喚獣が肩を切り裂かれる。

「ぐっ……」

「レ、レイ!!」

「大丈夫!？」

「大丈夫な訳あるか、アホ明久……」

余裕そうに斜口を叩くが肩を押さえたまま。明久と昌公にしか分からない痛覚共有の痛み、しかも明久の二倍。大丈夫とは言葉をかけた物の、そうでないことは明久自身が良く知っていた。

「……油断してんじゃねえよ、二人共。今の一撃は」

「ああ、分かってる」

「山下さん、だよね」

そう言つて三人は視線を二匹の猫に向ける。

「その通りにや」

その猫も、視線を向けていた。牙を持った猫、“牙猫”の名に恥じぬ肉食獣の眼で。

第七問（後書き）

雄二エ……。

ちよつとカツコ良くしすぎましたかね？

まあ、後悔はしてないですけど（笑）

では、次回も宜しくお願いします。

第八問（前書き）

更新できました♪変な所が多々あると思いますのでご指摘宜しくお願ひします。

第八問

牙猫。

文字通り牙を持った猫。

獅子。豹。虎。

いずれでもあり、やはり違う生き物。

王蛇、鬪狼、鬼熊、狂犬、咎鼠と共に文月の獣として恐れられる存在。

それが山下木天蓼。

幼い外見に合わせぬ過激思想、体軀に合う敏捷性、使用武器は近接オ
ンリー、理由はない。

「にははっ」

そんな獣と相対するのは明久、雄二、昌公。

いや、相対してすらいない。

今回の木天蓼の狩りは奇襲。雄二に攻撃し昌公に防がれた後、木天
蓼の召喚獣は仲間の召喚獣の影に隠れた。

木を隠すなら森の中。召喚獣を隠すのもまた然り。

と言うわけで、現段階明久達は、再びEクラスに囲まれ、その影か
ら一撃を放つ木天蓼の召喚獣の脅威に晒されていた。

「どうする雄二」

「……よし、陽動作戦だ」

「陽動？何する気だ？」

「まず明久が突っ込む」

「ふんふん」

「で、レイが俺を守る」

「ふむ」

「そして明久が山下を捕獲」

「待つんだ雄二！攻撃しながら捕まえるなんて、それは僕の負担が
大きすぎない！？」

「それしか……ないか」

「レイ！そんな深刻な雰囲気を作らないで！断りづらくなるでしょう！」

と、漫才を挟む三人。だが声には会話内容程の余裕はない。

この一瞬、この一時ですら猫科の肉食獣は、字の如く虎視眈眈と狙っているのだ。油断も隙も漫才も見せれないし魅せれない。

その緊張、それを分かっていているため、木天蓼も攻撃の手を止めている。同じくEクラスの生徒も先程の失敗を踏まえ、武器を構え明久達を囲むのみに止めている。ここで出来る最善策は木天蓼への一任。EF戦はここまで三十分が経過。現在膠着状態にあった。

「で、本当にどうしようか？」

「だから明久が突っ込んで」

「雄二、一回やったネタは使えねえぞ」

「全く、雄二は何も分かってないね」

「やるならもつと後だ」

「そうそ……違う！僕の言いたいことと違うよ！？」

「そうだな、早計だった」

「待て雄二！それはさっきのやり取りがもう一回あるって振りなのかい！？」

有効な打開策がないため時間稼ぎのやり取り。しかし雄二は焦っていた。

当初はDクラスとの戦争で仲間の指揮と操作技能を高める予定であった。だが予定は決定ではなく、現実にはEクラス戦の最中。この後控えられているDクラス戦に向けてこの戦いにかけられる時間は一時間。三人だけで行くと言った昌公には驚かされたが、操作技術一、二位の明久、昌公がいるため何とかいけるかと思っていた。余談だが昌公は明久が観察処分者になって以降、明久だけに雑用を押し付け先に帰る事が多くなったため、昌公の操作技術は明久よりは低かったりする。

（（甘かった、か））

雄二と昌公の思考が一致する。

雄二は焦っていた。そしてそれは油断だった。

ゾワッ。

喉元に食らいつかれたかのような背筋の強張り、それに合わせるように雄二に迫る木天蓼の召喚獣。

「ッ！うっ！」

「明久！このニャン公！」

「にはは、ニエコにやめんにや！」

明久が身を盾にし木刀で反らすも脇腹を切り裂く。昌公が追撃するも再び召喚獣の森の中へ猫は逃げていった。

「イタタ……すばしっこいね」

「何点減った、明久」

「十点程……レイは？」

「三十。一応ガードしたがな、鶴嘴が間に合わなんだ」

「山下、お前は？」

「Eの平均程度……にや？にやんだこの自然にや受け答え？」

つつい乗せられてしまうFペース。それでも目は肉食獣、関係は狩る側と待ち伏せる側。

「にやゝはっはっはっは」

木天蓼の高笑いが響く。勝ち誇ってはいない、さっきのやり取りへの笑い。

「やつぱ面白いにや」楽しくて仕方ない」

クスクスと本当に楽しそうに無垢に笑む。だが彼女の分身は、未だ身を潜め明久達を狙っている。

「嫌な女だな、山下さん」

「あんたにや言われたくにやいにや、こがみん」

軽口対軽口。悪口対悪口。

だが何を囁きうるうとも状況の好転は望めそうもない。

ただ、力が要る。

策を弄する相手には同じく策をぶつけるより力で破る。

策に嵌まった上で、それを叩き潰せれば、既に半数以上を削り、手負いの連中しか残ってないEクラスは壊滅は必至。

（（でもなあ……………））

そんなのが、ない。と、口に出さぬが思考一致。

「……………ねえ」

「え？あ！」

不意に後ろから声がして、昌公が思い出したようにすっとんきょうな声を一つ。

「びつくりした、脅かさないで……………あ！」

「どーしたレイ、腹でも下し……………あ！」

遅れて明久、雄二。その目線は昌公の背後、そこにへばりつく様に負ぶさる侑奈がいた。

「……………顔は前を向く……………」

命令。三名とも再び木天蓼達の方に向く。そのやり取りに頭に疑問符を浮かべる木天蓼、数秒間沈黙し、突如ハツとした顔を作ったと思えば、今度はジト目で明久達を睨み呟く。

「……………ゆにゃゆにゃによこと、忘れてたかにゃ？」

「……………」

すーっと目を逸らす三人、さすがに木天蓼もこの隙はつく気も起きず溜め息をつくのみに留めた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

気まずい沈黙が明久達四人を中心に教室中を支配する。

「……………ねえ」

その沈黙を破るのは侑奈。だが、か細く昌公にしか聞こえない声で。

「……何だよ」

昌公も同じく唇をほとんど動かさず囁き返す。

「……忘れてた……」

「……はい」

「……後で説教……」

「……はい」

「……今負けそう……」

「……まあな」

「……手伝ってあげようか……」

「……は？」

何でそうなるねん？

と思わずエセ関西弁が口につく衝撃を覚えた。

侑奈は主語がない、故にその提案は必ず聞き返す手間がいる。侑奈は無意識の事らしいが。

「急に何だよ」

「……坂本君……」

「？」

「……戦死したら設備が下がる……」

侑奈は主語がないが我はある。常にマイペース、それが彼女。そんな彼女が危惧しているのは試召戦争敗北のペナルティの事。

侵略側が試召戦争に勝利した場合、勝者は敗北したクラスと設備を入れ換える権利を得る。明久はこの制度を使って瑞希をAクラスの設備で過ごしてもらおうと雄二達に戦争を提案したのだ。反対に侵略側が敗北した場合、設備のランクが一つ下がる。Fクラスの設備は卓袱台と座布団、これより低い設備などFクラスにとって、なおかつ侑奈にとって背筋が寒くなる話だった。

「……困る……」

「……っただけ自分本意だよ」

ハッと吐き捨てるようにぶっきらぼうに答える昌公。だが侑奈の力

がなければ切り抜けられないことは一目瞭然だった。

「分かったよ……姉貴、力を貸してくれ」

その言葉に侑奈は溜め息を一つつき冷めた風に呟く。

「……昌……私、あなたのその態度は嫌い……」

「奇遇だね、オレも姉貴のそう言うところ嫌いだね」

同じく昌公も冷たく言う。

「……そう……でも……」

「ああ……ま、」

そして二人は異口同音に

「「（……）嫌じゃないけど（……）」」

そう口にし、微笑んだ。

「明久」

「ん、何？」

「オレと姉貴で乱す、お前は山下さんをやれ」

「……了解」

「雄二、お前は代表を討て」

「命令しやがって……ま、いっちょ乗ってやる」

そう言って三人は呼吸を合わせ始める、一斉に動くために。その動作に不信を覚え、飛び掛かろうと木天蓼の召喚獣が構えたのと同時に、明久達の作戦は決行された。

「やつ……」

昌公の召喚獣が前に突っ込むと同時に、囁くような声がキーワードを詠唱する。

「……試獣召喚……」

昌公の足元、正確には侑奈の下から魔方陣が現れ、侑奈の分身が姿を現す。

文月学園の物と良く似た制服。その上からフードとマントが一体化した青い衣を纏い、手には何も握られていない。

四体目の召喚にEクラスが覚えたのは脅威でなくやつとかという呆れ。

『所詮Fクラスだ、今更玉碎覚悟で来ようと同じだ』

『来るなら、かかって来い！』

そう言つて挑発するEクラス。そして侑奈はそれに乗った。

「……遠慮無く……」

昌公と正反対の方に走った侑奈の召喚獣は、その制服の袖口に隠された短刀を取りだし、一気に三体の召喚獣を切り伏せた。その頭上には“149”の文字が浮かんでいた。

『なっ！？』

『Cクラス並の点数……！？』

驚愕に呆けるEクラス生徒の召喚獣に、両手に持った短剣を投擲し、二体の屍を生む。それに向かって走り、刃を回収しつつ新たな犠牲者を作っていた。今度こそ侑奈の召喚にEクラスは脅威を抱いた。昌公の方も鶴嘴を振るい相手を圧倒。

木を隠すには森の中。ならば根こそぎ伐採して見つけるのみ。

攻撃のタイミングを逸し、昌公が侑奈を狙おうとしていた肉食獣の分身は隠れ蓑の消失によつて、明久に捉えられた。

『吉井明久 保健体育 61点』

VS

『山下木天蓼 保健体育 102点』

「ふっ！はっ！」

「につ、にやにや！？」

踏み込みと共に、右手で掴まれた木刀が鋭い一撃となり頭に落ちる。それを躲すも、手持ち無沙汰の左手が木天蓼の召喚獣の頬を打つ。

一瞬怯んだところへ木刀の連撃。今度は躲す間もなくなぶり尽くされ、木天蓼の召喚獣はかき消えた。

そして、雄二も昌公と侑奈の手によつて乱された円をくぐり、宏美と美子の前にいた。

「終わりだな、中林」

「ま、まだ！Eクラス三上、Fクラス坂本に」

グサリ。

「申し込……え？」

宏美の盾になろうと前に出た美子の召喚獣は昌公が投擲した三日月によって貫かれ煙となった。

「行け！雄二！」

雄二に託し、武器を捨て現在逃げに徹する昌公から、声が飛ぶ。それに応えるように雄二は突撃。拳の弾幕によって宏美の召喚獣を討ち果たした。

第八問（後書き）

決着しました。

木天蓼の装備はまたいずれと言うことで。

侑奈も姫路さんと同じで途中退席でF入りしたんです。でも御伏四の世界（略して御伏世）では振り分け試験は二日間なんです。姫路さんは初日に、侑奈は二日目に退席したんです。そして、さすがに初日の成績まで白紙にはしないだろうと思って初日に受けた教科の保健体育で昌公達の力にすることにしました。

最後に各クラスの平均点ですが御伏世（気に入った）ではBCDがちょっと高めです。

A	200
B	175
C	150
D	125
E	100
F	75

25刻み。そう、作者の都合です（爆笑）

教科は12教科にしてあるので原作四巻で明久がDクラス一人辺りの総合点数1500って言ってましたので教科平均をこう設定しました。

ではまた読んでいただけたら幸いです♪

第九問（前書き）

今年最後の投稿です。なんかまとまりがないように感じて不完全燃焼です（<―>）

皆様今年は色々ありましたが、今日までここにあれを嬉しく思います。

来年も不肖御伏四と触れ合って下されれば幸いです。

第九問

「……普通、姉を忘れるか……」

「すいません」

「……ずっと負ぶってたのに……」

「申し訳ありません」

「……心の底では……」

「そんなことおもってません……ってあ！」

「……………」

「ごめんごめん！だから無言で鈍器はやめて！！」

Eクラス戦を終え、明久達は回復試験を受けていたクラスメイトと合流し、もう一時間テストを受け、現在春の風に乗って桜の花びらがあちこちに落ちる屋上で昼食をとっていた。

「……すぐ終わる……」

「オレの人生が！？」

「……男として……」

「どこを狙う気だよ！？」

そして現在、昌公は侑奈にどこから取り出した棘付きハンマーを使ったハートフルボッコタイムを過ごしていた。

「仲いいな、二人共」

「待つんじゃ明久、あれを仲良いように見えるのか？」

「何言つてんだ秀吉、会話が漫才そのものだろうが。遊んでるだけだ」

「……火上の殺気は本物」

「うーん、ウチも侑奈にアレ借りようかしら」

「あつ、あはは……」

心地好い風に吹かれ、和やかに過ぎ行く昼間。しかし次なる戦いへの幕は既に目の前にある。

「そうじゃ、昌公。次はどこを攻めるのじゃ？」

死に物狂いで姉を鎮め、握り飯をかぶり付く昌公に、同じく握り飯を手に持つ秀吉が問う。

「ああ、次はDクラスだ」

「D？」

昌公の口から出された、次の目標の名を聞き、美波が眉根を寄せる。

「美波ちゃん？どうしたんですか？」

「あ、いや……その……」

「？」

美波の表情の変化の理由を分からぬ瑞希が美波に問うが、答えに詰まり冷や汗を滲ませるばかりの彼女に更に疑問符を浮かべる。

一方男子陣、元Dクラスメンバーは美波の顔を見て、揃って微妙な表情を浮かべる。去年ちよくちよくDクラスの教室に押し入り、美波を押し倒さんとしていた少女の顔が頭に浮かんだからだ。

名を清水美春。文月学園彼女にしたいくないランキング第二位の称号を持つ少女。

決して可愛くない訳ではないがその恋愛対象が同性のみと言う事実と異性に対する狂暴さによって不名誉な二つ名を受容している。

「まあ、あの子にとっては男の子にモテるなんて寒気がする事らしいからむしろ誇っていたけど」

「……………」

そう遠い目をしながら語る美波に黙るしかない瑞希。

「ん？何で島田さんは清水さんがDクラスって知ってたんだ？オレ達皆知り合いのクラス分かったのついさっきだったのに」

「ああ、レイは遅刻したから知らなかったの」

「ギリギリセーフだったっての」

「……島田が教室に入っただけ一悶着あった」

康太が語るには、美波が教室に入りその設備の酷さに溜め息をして近くの席につこうとした際、話題の少女、美春が押し入って来たらしい。

『美春！？何でここに！？』

『お姉さまがいるところならどこにだって行きます！ああ、麗しのお姉さま……こんな男だらけのむさい空間に一人なんて……今美春のDクラスに案内します！』

『ち、ちよつと待って！』

『待つ暇が惜しいです！ここで脱がします！』

『何でいつもいつもあんたの話は飛躍すんのよ！？』

美波に狂恋を抱く少女、彼女を人は“狂犬”と呼ぶ。

「それで、島田が押し倒されかけたのじゃがの」

康太の話を引き継ぎ秀吉が次を話す。ちなみに康太は美波と美春の百合写真を撮っていたことをすっかり漏らし、美波の折檻を受けていた。

『さあさあ、お姉さま！美春と共に理想郷へ参りましょう！』

『やつ……やめ！』

狂気的美春と涙目の美波と、今か今かとシャッターチャンスを待ち構える康太と今から起こる情事へ期待に目を爛々と輝かせるFクラス生徒（呆れ顔の秀吉と寝そべってる雄二除く）。美波にとって地獄でしかない状況は――

「山本槇汰。あの男の所為で台無しになりましたわ」

「うおつ、清水！？」

「み、美春！？何であんたここに居るのよ！？」

秀吉の話を遮り、現れるは二つの縦ロールの髪型が目を引く少女、清水美春。噂をすれば影、証明されりである。

「忘れましたかお姉さま！美春はお姉さまのいるところならどこにだって行くと言ったはずです！さあ、お姉さま上着をこちらに！」

「だから何で飛躍するのよ！？」

「むしろ空間転移じゃね？百合的に」

そんな昌公のツツコミも介さず、狂犬は敬愛する想いの女性への求愛を止めない。

「……さっきもこんな感じだった」

ぼろぼろの体で康太が言う。

「うむ、そこで山本が来たのじゃ」

思い出すように秀吉が言う。

「待て待て、なんかフラグみたいな展開」

「美春！慾に塗れた掌で美波に触れるな！壱式飛型、“流衝”！」

「ぐふっ！？」

「だぞ……………お？」

「ま、マキ！？」

昌公の言う通り槇汰が美春の腹にドロップキックを繰り出しながら現れた。噂をすれば影、本日二度目の証明である。

「美波、無事か！？淫慾の化身に身を穢されることは無かったか！？」

「あ、う、うん……………」

金糸を揺らし、全霊で心配している目の前の少年を見て、美波が頷く。それを見て少年が安堵の色を浮かべる。

「そうか……………良かった……………」

「……………うん、大丈夫」

それを見て美波が破顔する、自分より大きい少年にまるで姉のように。

「……………」

一方Fクラスの面々は目の前の光景に押し黙るのみ。ただ昌公だけが二人の感情の模様の歪な何かを感じていた。

「美波、昼餉を共にしてはならないか？」

「あ、それは」

「それは駄目だ」

その時、二人の会話に雄二が介入した。その目は悪鬼の色を呈していた。

「……………何だ、貴様は」

槇汰はそこで始めて雄二がそこに居たのを認識し、声を低くして立ち上がる。

男子としては長い金の髪。雄二を視認した瞬間深く刻まれた眉間の

皺。瘦身なれど狼のようにしなやかな体。右手に握られた翠と橙の紐を結んだ黒い木刀。

その全てが雄二を威嚇するように見えた。

「今は試召戦争のブリーフィング中だ、他クラスに聞かれちゃ困る内容も沢山あるからな」

対する雄二も臆することなく目を見据え立ち上がる。

二人の対話は見る者によつては、まるで羅刹と狼の睨み合いの様に見えた。

「ゆ、雄二」

「マキも抑えて」

剣呑な空気を感じ、二人の間に入る明久と美波。

「……………」

「……受理した」

その行動に先に折れたのは槇汰。

背を向き未だ気を失っている美春を担ぎ上げ階段へと向かう。

「何だ、逃げるのか」

「こら、雄二」

そんな槇汰に口を歪めニヤリと笑む雄二。そんな言葉に眉一つ動かすことなく、こう呟く。

「口先だけの狸々が」

そう言つて階段に姿を消す槇汰。屋上に残された面々は微妙な雰囲気にしばし沈黙することとなった。

「なんなんだ、アイツら？騒ぐだけ騒いでくれてよ、クカカ」

「ご、ごめんね火上、マキも美春もあんな子達なの」

「ホント、冷や冷やしたよ……………」

「雄二、お主のあれは心臓に悪いぞい」

「……一色触発」

「……何だか怖かったです」

間を置いて、いつもの感じに戻る明久達。

「一筋縄じゃ行きそうにない、か」

しかし雄二は思案顔でこれからの展開に警戒していた。

『ん、山本。急に飛び出してどこ行つてたんだ？』

『貴様に話す義理は無い』

『そうかい』

『キヒヒ、根本さんも嫌われてますねエ』

『うるさいぞ芳野。そうだ、あの二人はどれだけ情報を集めているんだ？』

『井川も小野も良く働いてくれて、かなりアりますよ。短期間なんでも質は保証出来ませんがね』

『そうか、まあいい。とにかくFクラスは連戦制を使ってDに攻め込む。これは正しいんだな』

『取れたてはやはやですよ』

『ならば勝つても一日は動けねえんだな、その間に策を準備するとするか。ハッ、ハハハ』

『エエ、我々Bクラスの勝利のために。キヒ、キヒヒヒ』

第九問（後書き）

設定についてはまた来年とすることでは！来年も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6068w/>

バカと邪臣と召喚獣

2011年12月31日23時49分発行